

タイトルなし

一月の夕暮れ。

信号待ちで停車中の私の前を、高校生カップルが渡って行く。こちらを向いた女学生のはじけんばかりの笑顔。しつかりとつないだ手。ほんの一瞬なのに、スポットがあたたったように輝いていた。青春はいつも美しい。いつの時代も。

ブレーキからアクセルに踏みかえながら、四十五年前の自分を思い出した。

中学二年の冬。各学年一クラスしかなかった、小さな山の中の中学校。まだ、だるまストーブが各教室にあった頃。一つ年上の男子に、ひそかに好意をもっていた。

その頃、週番というのがあって（どうしてそうだったのかは、記憶の彼方に消えてしまったが…）私と彼の二人だけで、週番の仕事をすめる日があった。一番最後に、各学年と職員室用の石炭バケツに、石炭を補充して廊下に置くことになっていた。

石炭の積まれた小屋に、バケツを二つずつ下げて入っていく。彼が石炭の山にのり、私がバケツを差し出す。彼がスコップで石炭をほり、私が押さえたバケツの中に入れる。

ザクツ、ザツ、ザクツ、ザツ…という音が響いて、わたしの心臓の鼓動を消していた。だまってバケツを替える。ザクツ、ザツ、ザクツ、ザツ。とても短い時間だったはずなのに、自分の手ばかり見つめていた長い時間。「重いから、一つ持てばいいよ」

終わると彼が言ったけど、首を振って二つぶら下げた。驚いたような顔のあとに、ふっと微笑んだ彼。笑うと垂れてなくなるかわい目目、大好きだった。そのあとはまた無言。廊下に並べ終わると

「おつかれさま」

「おつかれさまでした」

と、頭を下げた。心臓の音を聞かれそう、急いで教室にもどり帰り支度をする。

学校を出ると、少し前を彼が歩いていった。彼の家は学校から近く、私は三キロ歩かなければならない。もう少し、この距離を楽しんでいたいと思っていたのに、もう彼の家。

「気をつけて」

ふり返った彼が、そう言ってくれた。

その時の光景が、私の中の最高の一枚。セピアに染まった青春の一枚。たった一日だけ、ほんの少しの二人だけの時間。手をつなぐどころか、並んで歩くことも恥ずかしかった。いつ思い出しても胸がキュンとする。さっきのカップルも、どうかいい思い出を作れますように！